

アルフォンソ10世『イスパニア史』における動詞形式とその機能

寺 崎 英 樹

1. 序*

小論は13世紀にカスティーリャ王国で書かれた歴史書 *Estoria de España* (イスパニア史) に現れる動詞形式とその機能の特徴を概観しようとするものである。この作品は初期の中世スペイン語の特徴を示しているが、この時代の言語についてスペイン語史で一般に言われていることとは若干相違する点もあるように思われるので、そうした問題も合わせて検討することにした。

2. 作品について

今回取り上げる作品は、スペイン文学史では必ず引用されるにもかかわらず特に日本ではあまり詳細が知られていないように見受けられるので、作品そのものや著者等について最小限触れておきたい。

2.1. 書名

本書はアルフォンソ10世の著作とされる13世紀後半の散文による歴史書である。この作品の写本を研究し、校訂を行った高名な文献学者 R. Menéndez Pidal が1906年に *Primera crónica general* という題名で初めてテキストを出版して以来、一般に *Crónica general* という通称でむしろ知られている。このため、日本でもこれをそのまま訳して書名としていることが多い。たとえば、García López (1976) の翻訳では『大年代記』、原誠他 (1982) では『総合年代記』として引用している¹⁾。しかし、本来の書名はあくまで *Estoria de España* なのだから、引用する際には原題どおり『イスパニア史』または『スペイン史』とすべきであろう。ただ、日本語で「スペイン」と言うと、どうしても近代国家スペインがイメージされるのであるが、ラテン語の *Hispania* に由来する *España* は元来イベリア半島全体を指しており、中世にはその意味で用いられるの普通であった。スペイン語ではどちらにしろ *España* であるが、日本語ではイスパニアとスペインをこの二つの意味でそれぞれ区別しておくのがよいと思うので、やや古風に『イスパニア史』と訳すことにする。

2.2. 編著者

本書はカスティーリャ・レオン国王アルフォンソ10世賢王 Alfonso X el Sabio (在位1252-84) の著作とされる。アルフォンソ賢王(あるいは学者王)は、スペイン史上で周知の人物であるか

ら、あらためて詳説する必要はないが、政治面では有力貴族に擁立されたわが子に反乱を起こされ、廃位されるという結末が示すとおり、あまり有能であったとは言い難い。しかし、文化面では「賢王」という通称が示すとおり偉大な功績を残した。自ら詩人、作家であったばかりでなく、文芸の庇護者（メセナ）、あるいはオーガナイザーとしてより大きな役割を果たしたとされる（牛島，1997，p.7）。文学史・言語史の上では何よりも賢王の時代にその主導によってスペイン語が公用語化され、文章語としての規範が確立したということが重要である。

賢王が実際にどの程度本書の編纂作業にかかわっていたかは問題であるが、王の名で編纂された他の作品と同様、実情は明らかではない。この作品も王自身が執筆にかかわっていたとするものから王は後援者として資金を提供しただけとする両極端まで意見が分かれる。いずれにせよ、本書はある個人の著作ではなく、学者たちがチームを組んで編纂に当たったことは確かである（Solalinde, 1941, pp.19-20）。しかし、その数や個人名は全く分かっていない。この点に関し Brancaforte (1984, pp.15-16) は、王の役割は単なる資金提供者ではなく、現代の出版社の編集長のようなものであったろうと推定している。すなわち、全体の企画を立て、書名や執筆者を決定し、原稿の校訂などを行ったのではないかと言うのである。この作品の一貫した歴史観、語り口、文体などから考えると、おそらくこの見方は妥当であり、アルフォンソ王自身が執筆に加わることはなかったが、今日の監修者のような立場で主導権をとり、かなりの程度編纂にかかわったと見て間違いないだろう。

2.3. 編纂の経緯と内容

この作品は Menéndez Pidal の書名『最初の総合年代記』が示すとおり、スペイン最初の史書と言えるもので、1270年頃から編纂が開始されるが、1274年に中断してしまう（Rico, 1972, pp.36-43）。アルフォンソ賢王が『イスパニア史』の編纂を中断した理由について有力な仮説は、もう一つの歴史書として知られる General Estoria の編纂がこの頃始まったためではないかというものである（Rico, id.; Rubio Tovar, 1982, pp.20-21）。すなわち、『イスパニア史』（以下 EE と略す）は General Estoria、つまり『世界史』（以下 GE と略す）²⁾の一部に組み込まれることになったので、重複を避けるため中断されたものらしい。しかし、GE の編纂は天地創造の時代から始まって新約聖書の時代まで書かれた後で中止され、ついに未完に終わってしまった。一方、EE の方は、アルフォンソ賢王の死後、その後継者サンチヨ4世（在位1284-95）によって編纂が再開されるが、賢王の父であるフェルナンド3世の時代まで記述がなされたところで編纂事業が中止されたらしい。

さて、EE の写本は多数あるが、原本は残っていない。Menéndez Pidal が『最初の総合年代記』を刊行するに当たって主に参照したのはエスコリアル第2写本 Manuscrito escurialense E2と

呼ばれるもので、14世紀半ば（1340-45頃）のものである。実は、GEもEEもまだ完全な版は存在しない。EEは、Menéndez Pidalによって刊行されたものが定本となっているが、これも完全なものではないと言われる。写本の研究はまだ不完全なままで、特に作品後半のテキスト批評はまだ進んでいないのが現状である (Fernández-Ordóñez, 1992, p.12)。GEの研究はもっと不完全で、Solalindeらにより刊行されたテキストがあるが、それは全体の一部にすぎない (id.)。

Menéndez Pidalの研究によれば、EE全体は1050章から成っているようだが、アルフォンソ賢王の存命中に書かれたのは第616章前半までらしい (Ayerbe-Chaux, 1982)。第616章までの作品の構成は、あらまし次のようになっている。序文 *Prólogo* の後、天地創造から始まって、ヘラクレスの伝説的なイスパニア遠征、カルタゴの支配、ローマの支配、ゲルマン人の侵入、ゴート王国の成立、モーロ人の侵入、アストゥリアス王国の勃興が記述され、最後の616節はアストゥリアス王アルフォンソ2世純潔王 *Alfonso II el Casto*（在位792-842）の事績が述べられている。この作品は当時あったさまざまな文献を利用して編纂されており、全体を通じていろいろな歴史的エピソードが連ねられた歴史物語になっている。そのエピソードは神話、伝説、伝承が事実とない交ぜになっていて、現代の観点から見れば、歴史的事実とは言えないものが多い。

ところで、アルフォンソ賢王がEEの編纂事業を企てたのは、賢王が神聖ローマ皇帝の帝位に野心を燃やしていたことと関係があると言われる (Brancaforte, 1984, p.12)。この作品には、ローマ帝国の正統な伝統を継承するのは西ゴート王国であり、カスティリヤ・レオン王国はその直系であることを示したいという意図がこめられていたと言われる (Fernández-Ordóñez 1992, pp.19-21)。実際に、最初の部分ではローマ史に大きな比重が置かれ、ローマ人がスペイン人の祖先としてどんなに偉大かつ強大であり、しかも寛容であったかが述べられている。また、序文では歴史はあくまで人間の行った出来事 *fecho* であることが強調され、歴史は神意のままに動くというような中世的な歴史観はとっていない。しかし、当然のことながらキリスト教的な立場は一貫していて、ローマに征服されるユダヤ人は貪欲で残酷であるというイメージで描写され、ユダヤ人がローマに征服されたのはキリストを処刑した報いとして必然であったという趣旨が述べられる。また、ムハンマドの生涯が詳しく記述されている一方で、アラブ人もユダヤ人に劣らず貪欲で残酷であるということが叙述される。アルフォンソ賢王が「三宗教の王」と呼ばれ、文化的な面で寛容と普遍性を原則としていたこと (牛島, 1997, p.7) は事実であろうが、いかに寛容であったにせよ、当然のことながらこの時代のキリスト教徒的な偏見から自由でなかったこともまた事実であったと言わなければならない。

2.4. 調査資料

小論では、Menéndez Pidalの前掲書を底本とする Brancaforte (1984) のテキストを調査資料と

した。前記のとおり、アルフォンソ王在位中に書かれたのは616章前半までとされているが、同書に収録されているのは prólogo と第6章から第559章までの計17章分が抜粋されている。

この研究では、同書の pp. 45-84まで、すなわち prólogo と10章分（6, 7, 8, 9, 66, 113, 125, 151, 157, 183）を資料とした。資料とした部分で主に記述されているのは、伝説的なギリシャの英雄ヘラクレス（ラテン名ヘルクレース Hercules）の時代およびローマ時代の歴史である。

3. 動詞の種類と頻度

3.1. 動詞の語数

資料中に現れる動詞の延べ語数は2,534語である。明らかに名詞化している不定詞および形容詞化している過去分詞は除いた。この中で同じ語彙素の活用形式と見なしてよいものをまとめると、違い語数は310語である。なお、複合時制を構成していると見られる場合も別の動詞としてそれぞれ数えた。ただし、未来形と過去未来形は不定詞と助動詞が分離している場合のみ別々に数えた。

3.2. 動詞の頻度

出現頻度の高い動詞を20位まで不定詞の語形で示す。現代語と語形または正書法が異なる場合は、現代語の形式をカッコ内に示してある。

表1. 頻度の高い動詞

1. seer (ser)	314	11. poder	36
2. auer (haber)	176	12. dar	34
3. fazer (hacer)	171	12. poblar	34
4. dezir (decir)	115	14. estar	31
5. querer	60	15. comer	30
6. llamar	58	16. contar	28
7. saber	47	17. fallar	27
8. poner	44	17. tener	27
9. uenir (venir)	41	19. començar (comenzar)	26
10. yr (ir)	38	19. destroyr (destruir)	26
		19. morir	26

これらはいずれも現代語でも使われている頻度の高い動詞で、後の時代に音韻や正書法上の変化を被っている点を除けば、特に変わった特徴は見られないが、通常の動詞としても助動詞としても多用される seer と auer の頻度が非常に高いのが目立っている。

4. 動詞形式と機能

4.1. 直説法

動詞に限らず全般的に語の正書法は一貫しており、異形の出現もそれほど多くない。この点で12世紀半ばないし13世紀初めの作品とされる『わがシッドの歌』(Cantar de mio Cid) などとは対照的である。やはり国王の名の下に正史として明確な言語規範を意識しつつ編纂されたからであろう。

本書は歴史書であるから過去の出来事の記述が中心であり、当然に直説法の過去時制の使用が圧倒的に多い。単純過去、未完了過去および過去完了(RA形)が多数出現する。現在形が使用されるのは直接話法による人物の発言の引用、「…が述べるところによれば」(segund cuenta Lucan)とか「今は…と呼ばれる」(que llaman agora Montaragon)などのような著者の注釈的な説明文にほとんど限られている。歴史的現在のような叙述スタイルは見られない。同様の理由で未来形も非常に少ないが、逆に過去未来はかなり現れる。どの時制も出現するのは三人称が圧倒的に多い。

複合時制に関しては、資料の中で現在完了はきわめてまれであり、直前過去完了と複合過去完了の例も比較的少ない。未来完了と過去未来完了の例は今回の資料の中にはない。総括すると、資料中に現れる直説法の時制は次の9種類である。

単純時制：現在 未完了過去 単純過去 過去完了 未来 過去未来
複合時制：現在完了 複合過去完了 直前過去完了

[1] 現在 presente

現在形の形式に関しては、この時代の中世スペイン語について一般に言われている特徴と特に変わった点は見られない。人称語尾に関してもほぼ一貫性が保たれている。三人称単数で語尾-eを脱落させる動詞として diz (dezir), faz (fazer), quier (querer) の3つのみが現れる。ただし、quiererには語尾音脱落を起こさない異形 quiereもあり、全く同じ環境で交替して出現する(quier 10例, quiere 5例)。語尾音脱落形は como quier queのような慣用化した表現でも現れるが、このような慣用句は上記の数に含めていない。

主要な不規則動詞 seer と auer について現在形の語形変化表を構成すると、次のようになると考えられる³⁾。

表2. seer および auer の直説法現在

seer:	so	eres	es	somos	*sodes	son
auer:	e	*as	a	auemos	auedes	an

初期の時代, auer には通常の動詞形 aue と助動詞として用いられる短縮形 (h)a の 2 系列の異形があったと推定される (Penny, 1991, p.164) が, 本書の時代にはすでに短縮形に統一されていて, ただ一・二人称複数だけが非短縮形 auemos, auedes となり, 未来形に現れる助動詞は短縮形 emos, edes に分化している.

[2] 未完了過去 imperfecto

-ar 動詞は -aua- の語尾をとるが, -er / -ir 動詞は 1 人称単数が -ia の語尾をとるほかは母音連続 hiato を解消して二重母音化した -ie- の語尾をとる: ofrecia, solies, recibie, fiziemos, querien. この場合, 二人称単数以下の活用形ではすべて強勢は二重母音 -ie- を含む音節にある⁴⁾. まとめると, 未完了過去の語尾は中世語で一般的な次の体系をなしていると考えられる.

表 3. 直説法未完了過去の語尾

-ar:	-aua	-auas	-aua	*-auamos	*-auades	-auan
er/-ir:	-ia	-ies	-ie	-iemos	*-iedes	-ien

なお, 現代語において未完了過去で不規則活用をするのは ser, ir, ver の 3 動詞だけであるが, seer, yr はやはり不規則である: era, eran; yua, yuan. しかし, veer はこの時代は規則変化と見なすことができる: ueye, ueyen. いずれも資料中では三人称形しか出現しない.

現代語には存在しない特徴として -ir 動詞で語根母音 -e- / -o- を含むものは一般に母音変化を起こし, それぞれ -i- / -u- に変化する現象が見られる: ferir > firie, firien; morir > murie, murien. 語根母音が後続する yod に同化する現象である. 中世語では語源の語根母音にかかわりなく, 語根母音に -e- / -o- を含む -ir 動詞はすべて同じ環境で母音変化を起こしたとされる (Penny, 1991, p.169). 確かに, 母音変換動詞類に属する語 (現在形で母音変化を起こす動詞) は, 未完了過去でも上記のような母音変化を起こすのが原則と見られる: ferir > fieren (現在) / firien (未完了過去). しかし, 同じ環境なのに母音変化を起こしていない例も 1 つだけ現れる: emir (=gemir) > emien⁵⁾.

[3] 単純過去 pretérito

中世語では単純過去形の規則活用において -ar 動詞, -er / -ir 動詞とも 2 人称単数, 1 人称複数および 2 人称複数の人称語尾についてはほぼ次の 2 系列が併存していたとされる (Penny, 1991, pp.180-181) : -ast(e) / -est(e), -amos / -emos, -astes / -estes; -ist(e) / -iest(e), -imos / -iemos, -istes / -iestes.

しかし, 今回の資料では, -ar 動詞では二人称単数に -est のみ (neguest, demandest), 一・二人称複数形は逆に -amos, -astes の系列 (fallamos, dexastes) しか現れない. 一方, -er/-ir 動詞も二人

称単数では *-ist* (*mercest*), 同複数では逆に *-iestes* (*cometiastes, recibiestes*) の系列が現れるのみで, 一人称複数の例は見つからない。したがって, 本資料に現れた限りでは, 直説法単純過去の規則動詞語尾は次のような体系をなしていたと推定するしかない。

表 4. 直説法単純過去の規則動詞語尾

-ar:	-e	-est	-o	-amos	-astes	-aron
-er/-ir:	-i	-ist	-io	*-iemos ⁶⁾	-iestes	-ieron

未完了過去と同じく, 語根母音 *-e/-o-* を含む *-ir* 動詞は一般に母音変化を起こす現象が見られる: *pedir > pidio, pidieron*; *destruyr > destruyo, destruyeron*.

不規則動詞 *fazer* は, 単純過去で一人称単数を除く全部の活用形が見られる: *fezist, fizo, fiziemos, fiziestes, fizieron*. 強変化の不規則動詞のうち, 現代語とは異なる形態を持つ主要なものは次のとおりである: *andar > andudo / ando, auer > ouo, estar > estudo, foyr > fuxo, plazer > plogo, saber > sopu, tener > touo*. また, *seer* の単純過去は語源的にラテン語 *esse* の完了に由来する *fue* と同じく *sedere* の完了に由来する *souo* の両形式が出現するが, 前者の例が圧倒的に多い。

[4] 過去完了 *pluscuamperfecto* (RA 形)

過去完了は単純過去と同じ語幹から派生する: *cuydara, uenciera, ouieran, troxiera* (< *traer*). 資料では主に副詞節と関係節の中で多数の例が出現する。

[5] 未来 *futuro*

未来形の出現は少ないが, 不規則形としては現代語と同じ短縮語幹を持つ *fare* (< *fazer*) のほか, 次のような現代語にない形式が出現する: *comer > combre, connoocer > connoocremos, morir > morredes*. いずれも未来形で強勢前の母音が *-a-* を除いて脱落するという中世語の一般的傾向に沿った形式である。分離形は3例のみ出現する。これも中世語の原則どおり, 無強勢代名詞を目的語とする場合である: *besar tē (=te besaré), auer tē (=te habré)*.

また, 中世語では未来にほぼ等しい機能を果たすいくつかの迂言形が用いられたが, 今回の作品では, その性格上例は少ない。それに相当すると思われる迂言形としては, *[a de /a + inf.]* および *[ua + inf.]* の構成をとる迂言形が現れる: *e de morir (=he de morir), van ferir (=van a herir)*. なお, 迂言句を構成する際, *yr, uenir, enuiar* などの自動詞は前置詞 *a* を必要としない: *uinien poblar (=venían a poblar), enuio dezir (=envió a decir)*. いずれも方向性の意味が含まれる動詞であることが共通している。

[6] 過去未来 *condicional*

未来形と同じ語幹から派生するが, やはり現代語には見られない不規則形が出現する: *crecer >*

creçries, meter > metrie, uenir > uernie. 分離形は1例のみ現れる: perder sie (=se perdería).

ほかに未来と同様、過去未来にはほぼ等しい機能を果たす迂言形として [auie a / de + inf.] および [querie + inf.] の例 (auie de destroyr, querie destroyr) が見られる。

[7] 複合時制

複合時制としては現在完了 [a + pp. / es + pp.] が少数出現するほかは、過去完了と直前過去完了が現れるのみである。上記のとおり、未来完了と過去未来完了は資料中に全く現れない。中世語の特徴として助動詞には auer を持つものと seer を持つものがある。助動詞 seer が他動詞と結びつく場合は、一般に受動形と解釈することができるので、自動詞と結びつく場合だけを複合時制と見なせるが、その例は少ない。反対に、auer は他動詞・自動詞ともにこれを助動詞とする場合が多い。

現在完了 perfecto compuesto は、すべて直話話法および読者に対する語りかけの文で見られる。[a + pp.] の類型 (auedes oydo) が3例、[es + pp.] が1例 (es muerto), 計4例である。過去完了 pluscuamperfecto compuesto は [ouiera + pp.] が14例 (auie conquista), [era + pp.] が5例 (eran caidos), 計19例見られる。直前過去完了 antepretérito は [ouo + pp.] が14例 (ouo poblada), [fue + pp.] が1例だけ (fue acabada) で計15例見られる。

他動詞の場合、複合時制の過去分詞と直接補語の性・数呼応は一貫して正しく行われているようである。

(1) E cuenta Lucan que desde la ouo alli poblada, que fue a Caliz o auie grand cibdat, e fallo y un gran templo que fizieran los gentiles por onra de Hercules, [...] (pp.52-53)

そして、ルカーヌスが語るところによれば、彼 [Julio Cesar] はそこにそれ [Yspalis] を建設してから、大都市があったカリスへ行ったが、そこで彼は異教徒たちがヘラクレスの栄光のために建てた大きな神殿を見つけた。

[8] 受動形

受動形式 [seer + pp.] は多用されるが、現在形の [es + pp.] は動作受動を表すのではなく、出来事の完了あるいは結果・状態を表す。すなわち、現代語であれば、[ha sido + pp.] あるいは [está + pp.] に相当する意味を表していると考えられる。

(2) Hercules, de que ya oyestes dezir, desde ouo fechas aquellas dos ymagenes de Caliz e de Seuilla, ouo sabor de ueer toda la tierra que era llamada Esperia, e metios por la costera de la mar fasta que llego a un logar o es agora poblada Lixbona, e fue depues poblada que Troya fue destruida la segunda uez; [...] (pp.53-54)

ヘラクレスは、すでにあなた方がお聞きの通り、カリスとセビーリヤのあの二つの像を建ててから、エスペリアと呼ばれる土地全体を見たいと思い、海岸を通過して進み、今はリシ

ユボナ [リスボン] が建設されている場所に達したが、それはトロヤが二度目に破壊された後に建設されたのであった。

この作品の書かれた13世紀に [es + pp.] は現在の意味を獲得し、新たに [ha sido + pp.] の形式が出現したとされる (Andrés-Suárez, 1994, p.154) が、このような現在完了形は資料の中には現れない。

4.2. 接続法

接続法の場合も、直説法の場合と同様、史書という性格から現在形は非常に少なく、直接話法の場合に限られる。これに対し過去形 (SE 形) は多数出現する。未来形は現実的条件文の前提節に1例 (si pararemos...) 見られるのみである。

この時代は、過去と過去完了が形式・機能ともに未分化だったはずであるが、資料には過去完了 pluscuamperfecto compuesto [auer / seer の過去 SE 形 + pp.] が4例現れる。このうち1例のみ助動詞が auer であり (ovuïessen fallado)、残る3例は助動詞が seer であるが⁷⁾、その中の2例は fuisse (fuisse osado, fuessen tornados)、1例は souïesse (souïesse buelta) の形式をとっている。過去完了以外の複合時制は全く見られない。結局、接続法で出現する時制は次の4種類である：

単純時制：	現在	過去	未来
複合時制：		過去完了	

4.3. 命令法

命令法は、vos に対応する複数形が15例現れる: sabet, tomat, seet, partat. 命令法の用例は直接話法による引用か、読者に対する語りかけの文である。活用語尾の末尾には -t と -d (seet, gostad) の両形式が現れ、実際の発音は同じであった可能性も高いが、正書法上は前者が圧倒的に多い (13対2)。

なお、he aqui の表現が4例現れる。この he は auer の命令形とも見なされるが、上記の命令法の実数には含めていない。

4.4. 無人称形

[1] 不定詞 infinitivo

中世語の一般原則に従って前接代名詞と共起する場合は融合する: comello (=comerilo), destroylla (=destruirlla), combatellos (=combatirlos)。

[2] 現在分詞 gerundio

形態上では現代語と変わった点はない。中世語では gerundio が前置詞 en と共起することがで

きた。この形式はフランス語の *gérondif* に相当し、主動詞との同時性を表していたと言われる。この形式が2例見られるが、前置詞の付かない場合の方が多く、それらとの意味の相違はほとんど感じられない。

(3) E en buscando aquesto, fallaron las figuras de las letras; et ayuntando las, fizieron dellas síllabas, fizieron dellas partes; e ayuntando otrossi las partes, fizieron razon, [...] (p.47)

そして、このことを探し求めていて彼ら〔賢人たち〕は文字の形を見つけた。そして、文字を集めて、音節を作り、音節を集めて語句を作った。そしてまた、語句を集めて文章を作った。

進行形は、この時代まだ十分に確立していないと見られるが、[estar + ger.] の構成は2例 (esudo catando, estaua callando) だけ見られる。現在分詞と共起し、迂言形を形成する動詞としては yr, andar, tener, durar があるが、特に yr の例 (fue yendo, yua leuando, etc.) が多い (8例)。

なお、初期の中世語では本来の現在分詞 (-ante, -iente) がまだ動詞的な機能を持って用いられている場合があるとされる (Gili Gaya, p.203) が、資料ではそのような例は見つからなかった。

[3] 過去分詞 participio pasado

規則動詞 -ar > -ado, -ir > -ido の語尾は現代語と変わらない。しかし、-er 動詞には -udo となるものと -ido となるものがある: *perdudo, sabudo, uençudo; caido, destroydo, fallecido, uendido*。ラテン語の第2活用 -ēre と第3活用 -ĕre に由来する -er 動詞は中世語ではこのいずれかの語尾をとり、13世紀まで両形式は自由に交替していたとされる (Penny, 1991, p.193)。しかし、資料では同じ動詞で両形式が交替している例はない。また、-ir 動詞の中にも -udo の語尾をとるものが同じ動詞で2例 (*apercebir > apercebudo*) 現れる。中世語の不統一性・不安定性を示していると言えるだろう。

現代語にない不規則形としては、次の例が見られる: (*querer >*) *quisto*, (*conquerir >*) *conquista*, (*maltratar >*) *maltrecho*。

5. 時制形式の機能

以下では時制形式の中で中世語らしい特徴が見られるものを取り上げ、その機能を考察する。

5.1. 複合形について

全般に単純時制の出現が多く、複合時制の使用は少ない。直説法では作品の性格上特に現在完了の実例が少ない。この点は単純過去と現在完了が自由に交替しているように見える場合が多い『わがシッドの歌』などとは対照的である。ただし、現在完了が単純過去形とほぼ等しい機能を果たしていると思われる事例が一つだけ現れる。すなわち、読者に向けて「すでにお聞きのとおり」の意味で単純過去の表現 «(assi) cuemo de suso oyestes» が3回現れるが、同じ意味で一度だ

け現在完了の «segund que auedes dessuso oydo» (p.65) が現れる。

直説法過去完了には単純形と複合形があるが、単純形の出現が圧倒的に多い。中世語では、これらの単純形と複合形は自由に交替したとされる (Andrés-Suárez, 1994, p.143)。しかし、実例を比較すると、単純形は過去の言及時点よりも前の時点で起きた出来事を表すと解釈できる場合が多い。つまり単なる前時性 *anterioridad* を示している。

(4) Mas una grand companna que auie y de los romanos que se partieran de Cipion quando la otra uogada uieran sobre Carthago e se metieran en la cibdat, no quisieron salir a los romanos cuemo los otros, por uerguença que auien dellos por el yerro que fizieran, nin se quesieron dar a prision; (pp.60-61)

しかし、かつてローマ人たちがカルタゴを攻撃し、この都市に侵入したとき、スキピオから分かれたローマ人の大きな集団があって、彼らは、自分が犯した過ちによりローマ人に対し抱いている恥辱感のために他の人々のようにローマ人の前に出て行きたくはなかったし、投獄されたくもなかった。

これに対し、複合形はある出来事の結果が過去の言及時点まで持続していると解釈できる場合が多い。

(5) [...] e esto por dos razones: la una, por que era su sobrino, fijo de su hermana; et lo auie el porfijado et fecho heredero; la otra, por que regnara ya con el doze annos dessouno et estaua cuemo apoderado de los sennorios de todas las tierras. (p.71)

そして、これは二つの理由による。一つは、彼 [Tiberio Cesar] が先帝 [Octauiano Augusto] の甥で、先帝の妹の息子であったからであり、先帝は彼を養子とし、相続人にしていた。

もう一つは、彼はすでに12年も一緒に統治をし、全領土の支配者となっていたからである。すなわち、*auer* の迂言形式である複合過去完了では今日の *tener* に相当する *auer* のアスペクト的な意味がまだ強く残っていて、単純形とアスペクト的対立をしていたと見なすことができる。つまり、両形式は単なる自由交替形ではないということである。

直前過去完了は、限られた時の副詞節で用いられ、しかも廃用化しつつある現代語とは異なり、中世語では過去完了または単純過去の文体的交替形として用いることが可能であったとされる (Andrés-Suárez, 1994, p.148)。しかし、この作品の中では一貫して固有の時制的価値を持って使用されていると考えられる。資料中で、この形式の用例は14あるのだが、この中の9例までが *desque* 節に現れる (前記 (1) の文例参照)。それ以外では *depues que* 節で3、*pues que* 節と *quando* 節で各1例が現れ、これらの時の副詞節以外では出現しない。これらの接続詞に導かれる節では過去完了単純形 (RA 形) および複合形が現れることは全くない。このことから見ると、直前過去完了形は明らかに過去完了とは区別して用いられている。一方、これらの副詞節に単純

過去が現れることはあるが、逆に主節で直前過去完了が現れることはないので、この時制が単純過去の単なる交替形として用いられていたとは考えられない。つまり、直前過去完了には明確に直前性 *anterioridad inmediato* を示すというアスペクト的価値があり、単純過去や過去完了とは異なる機能を果たしていたと見ることができる。

接続法ではすでに複合過去完了の形式が用いられているが、後に示すように、過去形が過去完了の機能を果たしているとみられる例もある。また、現在完了と未来完了の例は見られない。したがって、この資料だけを見る限り、接続法の複合時制体系が形式・機能ともに確立していたかどうかは明らかでない。

5.2. RA 形と SE 形について

[1] 条件文

中世語ではすでに直説法過去完了 RA 形が条件文に現れ、接続法過去 SE 形の領域に入り込んでいたことが知られている。RA 形はまず条件文の帰結節で使用されるようになり、13世紀半ば以降に前提節にも及んだとされる (Andrés-Suárez, 1994, p.147)。そこで、両者の用法はどうなっているかまず条件文で検討した。条件文の実例は少ないが、RA 形と SE 形が含まれる *si* 条件文 10例を観察すると、前提節と帰結節では次のような対応が見られる。

表5. *si* 条件文における時制の対応

前提節	帰結節	用例数
SE 形	SE 形	1
SE 形	RA 形	2
SE 形	過去未来	4
SE 形	その他 ⁸⁾	2
RA 形	過去未来	1

これを見ると、非現実仮定の条件文の前提節では SE 形がまだ圧倒的に優勢であると言える。最後のケースは、前提節で RA 形が現れているが、この 1 例も意味的には非現実的仮定というより過去に現実起きた出来事を提示する開放条件の仮定である。

(6) [...] e depues dixo que si Alexandre tan pequenno fuera de cuerpo e tan feo e tan grandes fechos e tan buenos fiziera, el, que era tan fermoso e tan grand, por que no farie tan grandes fechos o mayores. (p.53)

そして、彼 [Cesar] が後で言うには、もしアレクサンドロスがこれほど体が小さく、これ

ほど醜くかったのに、あれほど大きなよい業績をなしとげたのならば、これほど大きくこれほど美男の自分は、なぜあれほど大きな、あるいはそれ以上の業績をなさないことがあるうか。

帰結節の時制形式はばらつきがあるが、過去未来が優勢である。しかし、RA 形も2例出現していて、過去の事実と反する仮定に対応している。

(7) [...] ca de tod esto et dotras cosas muchas no sopieramos nada si, muriendo aquellos e eran a la sazón que fueron estos fechos, non dexassen escrituras por que lo sopiessemos; [...] (p.48)

というのは、もしこれらの出来事が起きた時代にいた人々が死んでしまい、われわれがそれを知るように書物を残してくれなかったなら、このすべてのことやその他多くのことについてわれわれは何も知らなかったことだろう。

帰結節に SE 形も 1 例現れているが、これは帰結節が目的を表す *por que* 節に組み込まれているためであって、典型的な条件文とは言えない。

(8) [...] et comio una partida del et escondio lo al por que non gelo fallassen si sobreuiniessen algunos. (p.81)

そして、彼女はその一部を食べ、だれかが不意に来てそれを見つけないように残りを隠した。

なお、SE 形が前提節に現れる条件文の大部分でこの SE 形は過去形として機能しているが、過去の事実と反する命題を仮定していると解釈できる場合、つまり現代語で言えば過去完了に相当する場合もある。前記の (7) はその 1 例と言える。

少なくともこの資料で見ると、非現実的条件文では出来事の起きる時点にかかわらず、前提節では SE 形を用いるのがまだ普通である。しかし、帰結節では過去未来のほかに RA 形がすでに浸透していたことが確認できる。

[2] *cuemo si / como si* 節

「まるで…のように」の意味の *cuemo si / como si* 節は 2 例のみであるが、いずれも SE 形が用いられていて、RA 形の例はない。

(9) [...] et por que pudiessen saber otrosi los que depues dellos uiniessen los fechos que ellos fizieran, tan bien como si ellos se acertassen en ello; [...] (p.47)

そしてまた、彼ら [賢人たち] は、自分たちが行った出来事をその後に来る人々がまるでそれに立ち会っているかのようによく知ることができるようにした。

[3] *por que* 節

por que 節では SE 形と RA 形両方の動詞が現れる。すなわち、SE 形が現れる場合は 16 例、RA 形が現れる場合は 13 例ある。しかし、*por que* 節は両義的であり、目的を表す場合 (10) は SE 形、

理由を表す場合 (11) は RA 形と明確に使い分けが行われている⁹⁾。

(10) [...] e entendiendo por los fechos de Dios, que son espiritales, que los saberes se perderien muriendo aquellos que los sabien et no dexando remembrança, porque no cayessen en oluido mostraron manera por que los sopiessen los que auien de uenir empos ellos; [...] (p.46)

そして、知識を持つ人々が死んで、忘却に任せないよう記憶を残さなければ、知識は失われだろこと霊的な神の御業により理解して、彼ら [賢人たち] は自分の後に来るはずの人々が知識を知るような方法を示した。

(11) [...] por ende, por que nasciera ell en el mes que auie nombre «quintil», e uenciera en ell a Ponpeyo en los campos de Thessalia, e a Gneyo Ponpeyo et a Sexto Ponpeyo, fijos de Ponpeyo el grand, en Espanna en aquel mismo mes otrosi, llamolo «julio» del su nombre. (pp. 63-64)

それゆえ、彼 [Julio Cesar] は「クインティリス」という名を持っていた月に生まれ、その月にテッサリア平原でポンペイウスに勝ち、まさに同じその月にイスパニアで大ポンペイウスの息子であるグナエウス・ポンペイウスとセクストゥス・ポンペイウスに勝ったので、その月を自分の名前から「ユリウス」と呼んだ。

[4] 名詞節と関係節

RA 形が que 名詞節に現れるのは10例だけ、ほかに que 関係節で現れる例が68あるが、いずれも直説法過去完了ないし過去の意味を持ち、事実を叙述するために用いられていると解釈できる。名詞節と関係節ではほぼ一貫して RA 形は直説法として機能していると思なしてよさそうである。

以上を総合すると、この作品では条件文においてすでに RA 形の浸透の兆しが見えるものの、RA 形と SE 形の両形式は直説法と接続法という異なる法的価値をまだ保って使い分けが行われていたと考えられる。

6. 動詞 auer と seer の意味および機能

現代語では haber と tener, ser と estar は機能が分化している。しかし、この時代は未分化の状態にあったはずなので、その実情を調査した。

6.1. auer と tener の対比

「持つ」の意味では、まだ auer が圧倒的な優位に立っていて、tener の例もあるが、少数である。tener の用例は27あるが、このうち「持つ」の意味で用いられているのは11例ある一方、「…と見なす、考える」(tener que..., tener por...) の意味の用例もそれに匹敵するくらい多い (10例)。

(12) A los que querien morir no les dexaua, ca tenie que era muy ligero tormiento la muerte; [...] (p.73)

死にたがっている人々に彼 [Tiberio Cesar] はそうさせなかった。なぜなら、死は大変軽い苦しみだと彼は思っていたからだ。

なお、[tener + pp.] の例 (tenie escrito) も 4 つ出現する。

存在を表す (h)ay の形式はすでに『わがシッドの歌』で出現しているが、この資料の中には現れない。副詞 y は多数現れるが、動詞 auer の三人称単数形は、中世語一般に見られるように、他の副詞句があればどの時制でも y と無関係に単独で存在の意味を表すことができる。

(13) [...] metios en poder de Cipion el e toda su companna; e assi fizieron todos los otros que auie en la uilla grandes e pequennos. (p.60)

彼 [ハスドルーバル] とすべての仲間はスキピオの支配下に身を置いた。そして、その町にいたその他の者は、すべて老いも若きもそのようにした。

6.2. seer と estar の対比

連結動詞としても所在を表す動詞としても seer が一般に用いられ、estar の用例は少ない。13世紀後半から estar は形容詞および過去分詞と共起する例が増え始めると言われる（中岡，1993，p.172）。確かに、過去分詞と共起して結果・状態を表す場合が全部の用例31の中で9例あるが、形容詞と共起する例は見あたらない。

現代語の進行形と同じ構成の迂言形 [estar + ger.] も現れているが、すでに述べたとおり、[yr + ger.] の方が頻度が高い。また、存在を表すと見なせる場合が3例だけあるが、現代語のようなどの場所にあるかを示すというより存在の持続性を表すことに意味の重点があると考えられる。

(14) E quando fue a aquel logar o estauan los pilares sobre que pusiera Hercules la imagen, cato la tabla de marmol que yazie por pieças quebrada, [...] (p.52)

そして、ヘラクレスがああ像を置いた柱のあるその場所に行ったとき、彼 [Caesar] は大理石の板が粉々に砕けているのを眺めて…

なお、不定詞 seer の形式はラテン語の sedere（座る）に由来するが、この語源的意味がまだ残っていると見られる例がある。

(15) «[...] et seed, ca luego uos parare la mesa.» (p.81)

「それでは、お座りください。すぐあなた方に食事の用意をしますから。」

7. 結論

13世紀後半に成立したこの作品に見られる動詞の形式と機能に関して、その主な特徴を次のようにまとめることができる。

(1) 中世スペイン語の大きな特徴の一つは、同じ語でもさまざまな変異形が共存し、その文法範疇の機能も不安定なことにあるが、13世紀半ばは中世スペイン語の言語規範がようやく成立し、文章語成立前に生じた混沌状態に一定の枠がはめられた時期である。この作品の動詞に関しても中世語で一般的な形態の不統一や時制体系の不完全さは確かに見られるが、その揺れや不安定さはそれほど大きなものではなく、むしろ全般的に動詞は比較的安定した形式を保ち、固有の機能を果たして使用されているように思われる。この点で、口承文学に由来し、遅くとも13世紀初めに写本が成立したとされる『わがシッドの歌』などに見られる語形と機能の不安定性・不確実性とは対照的である。

(2) 全般に単純時制の使用が多く、複合時制は比較的少ない。動詞の時制体系の中で複合時制はまだ十分に確立していなかったと見ることができる。特に接続法ではそうである。

(3) 複合時制は語源的な完了または結果を示すアスペクトを保っていると考えられる。中世語では単純過去完了 RA 形と複合過去完了が不経済にも共存し、交替していたとされるが、この作品を見る限り、両形式は単なる交替形ではなく、アスペクト的に相違があったと見られる。

(4) 複合時制の助動詞には *auer* と *seer* があったが、自動詞の場合でもすでに前者が優位に立っていた。また、他動詞の場合、直接補語と過去分詞は性・数の呼応を維持していた。

(5) 13世紀後半は過去完了 RA 形が接続法の領域を侵し始めた時期とされるが、少なくともこの作品に関する限り、RA 形と SE 形はそれぞれ直説法と接続法の語源的な法的価値をまだかなり明確に維持していたと言える。

(6) 「持つ」の意味で *tener* もすでに使用されていたが、まだ *auer* の使用が圧倒的である。*auer* は所有および存在を表す動詞として、また迂言形を構成する助動詞として非常に頻度の高い動詞であった。

(7) 連結動詞としては *seer* しかなかったと言ってよい。存在や結果・状態を表す *estar* もすでに使用されていたが、この意味でもまだ *seer* が圧倒的に優位に立っていた。

註

*小論は東京スペイン語学研究会（東京外国語大学、2000（平成12）年9月30日）で「Alfonso X, «Estoria de España»における動詞の形式と機能」と題して口頭発表した草稿を改訂したものである。貴重なコメントをくださった出席者の方々に謝意を表したい。

- 1) *Primera crónica general* というのは、Menéndez Pidal が一般向けにわかりやすく自著につけた題名にすぎない。その初版本（1906）の完全な書名は、*Primera crónica general; Estoria de España que mandó componer Alfonso el Sabio y se continuaba bajo Sancho IV en 1289*（最初の総合年代記／アルフォンソ10世が編纂を命じ、サンチョ4世の下で1289年に継続されたイスパニア史）となっている。たとえば、『古事記』を『日本最初の史書』と題して紹介するようなものであろう。
- 2) *General Estoria* は、García López (1976) では『大歴史総論』と訳され、その後これを踏襲している専門書もあるが、この訳語はあたかも歴史学の概論書のように適切とは思えない。内容から言えば、『世界史』とか『普遍史』とでも訳すべきであろう。

- 3) 表中で*印を付した形式は、今回の資料中に現れない推定形を示す。以下も同じ。
- 4) 使用したテキストでは原典どおりアクセント符号はいっさい使用されていない。
- 5) この動詞は母音変化動詞であるはずだが、現在形の実例は現れない。
- 6) ただし、不規則動詞の一人称複数には *fizíamos* (< *fazer*), *uiniemos* (< *uenir*) のような *-iemos* 形式とともに *pu diemos* / *pu di mos* (< *poder*) が出現するので、それから類推すれば規則動詞でも *-iemos* と *-imos* が併存していた可能性はある。
- 7) 自動詞と結合する場合のみ。受動と解釈できる他動詞の場合は除外した。
- 8) 直説法単純過去と接続法現在が各 1 例であるが、いずれも完全な条件文とは言い難い例である。
- 9) ちなみに、目的を表す前置詞は *pora* の形式 (< *por+a*) である。13世紀後半までこの形式が普通で、14世紀以降 *para* に置き換わったと言われるが、実際にこの資料では *para* は全く現れない。また、*pora que* という組み合わせは現れない。

参考文献

- Andres-Suárez, Irene, 1994, *El verbo español; sistemas medievales y sistema clásico*, Madrid, Gredos.
- Ayerbe-Chaud, Reinaldo, 1982, *Estoria de España; antología*, Madrid, José Porrúa Turanzas.
- Fernández-Ordóñez, Inés, 1992, *Las estorias de Alfonso el Sabio*, Madrid, Istmo.
- García López, José, 1976, 『スペイン文学史』東谷頼人・有本紀明訳, 白水社.
- Gili Gaya, Samuel, 1964, *Curso superior de sintaxis española*, Barcelona, Bibliograf.
- 原 誠他 (編) 『スペイン・ハンドブック』三省堂, 1982.
- Lapesa, Rafael, 1981, *Historia de la lengua española*, 9a. ed, Madrid, Gredos.
- Menéndez Pidal, Ramón, 1906, *Primera crónica general; Estoria de España que mandó componer Alfonso el Sabio y se continuaba bajo Sancho IV en 1289, tomo I. -Texto*, Madrid, Bailly-Bailliere e Hijos.
- _____, 1968, *Manual de gramática histórica española*, 3a. ed., Madrid, Espasa-Calpe.
- 中岡省治, 1993, 『中世スペイン語入門』大学書林.
- Penny, Ralph, 1991, *A History of the Spanish Language*, Cambridge Univ. Press.
- Rico, Francisco, 1984, *Alfonso el Sabio y la «General estoria»*, 2a.ed. corregida y aumentada, Barcelona, Ariel.
- Rubio Tovar, Joaquín, 1982, *La prosa medieval*, Madrid, Playor.
- Smith, Colin (ed.), 1987, *Poema de mio Cid*, Madrid, Cátedra.
- Solalinde, Antonio G., 1941, *Antología de Alfonso X el Sabio*, Col. Austral, Madrid, Espasa-Calpe.
- 牛島信明, 1997, 『スペイン古典文学史』名古屋大学出版会.

資料体

- Brancaforte, Benito (ed.), 1984, *Alfonso el Sabio, Prosa histórica*, Madrid, Cátedra.

Formas verbales y sus funciones en la «Estoria de España»

TERASAKI Hideki

La *Estoria de España* fue compilada por Alfonso X en la segunda mitad del siglo XIII y editada por R. Menéndez Pidal por primera vez en 1906 con el título de la *Primera crónica general*. Para aclarar las características gramaticales de esta obra, hemos estudiado, en especial, las formas y funciones de los verbos que aparecen en ella. Hemos examinado el prólogo y diez capítulos extraídos del texto editado por Brancaforte (1984) y hemos recogido en total 2.534 ejemplos de verbos, de 310 verbos diferentes. El análisis de estos datos nos conduce a las observaciones siguientes:

- (1) Generalmente los verbos de esta obra presentan formas y usos comparativamente estables, aunque hay algunas vacilaciones e incoherencias que también se observan en otros textos del español medieval.
- (2) En general se usan más las formas simples y poco las formas compuestas. Parece que todavía no estaban muy establecidas las formas compuestas, sobre todo, las del subjuntivo.
- (3) Las formas compuestas parecen mantener el aspecto etimológico del perfectivo y resultativo. Por ejemplo, la forma simple en «-RA» y la compuesta con el auxiliar «auer» del pluscuamperfecto indicativo no son formas alternativas sino formas diferentes cada una con su propio aspecto.
- (4) Se emplean «auer» y «seer» como auxiliares de las formas compuestas, pero el primero ya empieza a predominar aun en los casos del verbo intransitivo.
- (5) Se dice que en la segunda mitad del siglo XIII la forma en «-RA» empieza a invadir el territorio de la forma en «-SE» del subjuntivo, pero por lo menos en esta obra aquella forma se usa todavía manteniendo su valor indicativo con bastante claridad.
- (6) Ya se utiliza «tener» como un verbo con el significado de posesión, pero todavía es mucho más predominante «auer», que es un verbo sumamente frecuente no sólo como auxiliar de los tiempos compuestos sino también como verbo de posesión y existencia.
- (7) Se puede decir que «seer» era el único verbo copulativo. Pues, aunque ya se empieza a emplear «estar» que significa existencia, resultado o estado, «seer» sigue predominando.